過勝鹿真間娘子墓		山部宿禰赤人	作謌一首	并	短謌
勝鹿の真間の娘子が墓を過ぐるとき		山部宿禰赤人が	作る謌一首	并せて	短謌
かつしかのままのをとめがはかをすぐるとき		やまべのすくねあかひとが	つくるうたいつしゆ	あはせて	たんか
古昔	有家武人之	倭文幡乃	帯解替而	廬屋立	妻問為家武
古に	在りけむ人の	倭文幡の	帯解きかへて	伏屋立て	妻問ひしけむ
いにしへに	ありけむひとの	しづはたの	おびときかへて	ふせやたて	つまどひしけむ
ずっと昔	いたという男が	倭文織りの	帯を解き合って	寝屋を立て	共寝をしたという
勝壮鹿乃	真間之手兒名之	奥槨乎	此間登波聞杼	真木葉哉	茂有良武
葛飾の	真間の手兒名が	奥つ城を	こことは聞けど	真木の葉や	茂りたるらむ
かつしかの	ままのてこなが	おくつきを	こことはきけど	まきのはや	しげりたるらむ
葛飾の	真間の手兒奈の	墓は	ここと聞いたのだが	真木の葉が	茂っているからか
松之根也	遠久寸	言耳毛	名耳母吾者	不所忘	
松の根や	遠く久しき	言のみも	名のみも我れは	忘らえなくに	
まつのねや	とほくひさしき	ことのみも	なのみもわれは	わすらえなくに	万葉集　巻三　431
松の根のように	遠く久しいからか	言い伝えも	名前すら私は	忘れられない	山部宿禰赤人

https://kochi-esc.sakura.ne.jp/wordpress/%e4%b8%87%e8%91%89%e3%81%ae%e5%9c%b0%e5%ad%a6/